



会報

令和元年
会報第1号

発行・編集

鹿児島県教頭会

〒 892-0836

鹿児島市錦江町 2-16

鹿児島県公立小・中学校

教頭会館県教頭会事務局

Tel 099-226-8268

Fax 099-822-5580

会長就任のあしなひ



鹿児島市立鴨池小学校

教頭 下村 尚

去る五月九日に開催されました県公立小・中学校教頭会委員会におきまして御承認をいただき、会長に就任することになりました。

本年度の県公立小・中学校教頭会の会員数は七〇七名、うち教頭経験年数四年未満の先生が三九八名と五割を超えて、この三年で多くの教頭先生が任用されているのが本県の特徴です。

県下の教頭先生方のことを思い浮かべ、責任の重さを痛感しております。微力ではありますが、精一杯取り組んでまいりたいと思っておりますので、皆様の御支援と御協力のほどよろしく願います。

平成三十年度の全国公立学

校教頭会の個人調査結果を見てみますと、本県の教頭先生方は小・中学校ともに週休日等の出勤日数や休日のPTA行事や地域行事等への参加日数が全国の中でも群を抜いて高い割合となっているのが特徴です。所属する学校だけでなく地域でも重要な要素となっており、そこから、休日も地域との密接な関わりが求められていることが推察されます。

さて、四月一日に新元号が「令和」と決まり、五月一日から令和の時代が始まりました。新たな時代を迎え人口減少や少子・高齢化が急速に進む中で、Social ty 5・0（超スマート社

会）の到来とともに新たな時代を見据えた教育再生を大胆に進めることが求められています。しかしながら、補教の調整や外部との連絡や相談、公文書の確認や報告など、要となつて連絡調整に関わっている教頭先生方の職務は増える一方で、それに対応するため、日々尽力されていることと思います。

さらに、このような多岐にわたる職務の対応にとどまらず、教頭としての資質向上と連携を深めていくことで、課題解決の一助となつていくことが県公立小・中学校教頭会の役目と考えます。

今年度の研究は、全国公立学校教頭会第十一期全国統一研究主題「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育」の最終年度になります。二年間の研究の成果と課題のまとめの年になります。全公教では、すでに第十二期の研究主題「未来を生きる力を育み、魅力ある学校づくり」も定めています。私たち教頭は、「職能研修団体」として職務の専門性を高め、多岐にわたる教育課題に対応していく資質や能力を身につけていかなければなりません。

そこで、本会では次のこと

に重点を置いて進めてまいります。

第一に、第五十三回研究大会が多くの会員の皆さんにとつて充実したものであるように、提言者や指導助言者、役員として御協力いただき先生方等のお力を借りながら運営してまいります。

二つめに、県教頭会のホームページを広く周知し、九州大会や全国大会、各種研修会における最新情報を発信し特に新任の教頭先生方へ参考となる情報を提供してまいります。今年度は九州大会が熊本市で開催され、鹿児島県からは約一三〇名の教頭先生が参加予定です。

三つめに、教頭の処遇改善に向けた調査活動に努めるとともに、県教育委員会や県連合校長協会、全国公立学校教頭会などの各種団体とも連携を強化し、要請活動を継続してまいります。

四つめに、今年度の研究大会の反省をもとに、次年度の研究の方向性を定めていくことです。前記しましたが、来年度は、全公教の統一研究主題第十二期の一年目となります。各地区の

委員、研修部長、提言者の皆さんと連携を深めながら進めてまいります。

最後になりましたが、多くの課題が山積する教育現場ではありますが、この難局を乗り越えていくためには、教頭先生方のこれまでの経験と建設的な御意見が必要と考えます。県公立小・中学校教頭会は、今後も広く会員の皆さんの声を聞かせていただき、それを活かしながら相互の連携を深め、充実した活動を進めていきたいと思っております。新しい時代、令和元年度の各学校における教育活動が充実し、本県教頭会が順調に前進することを祈念しあいさつとさせていただきます。



私の勧める「冊の本」

『Think clearly』

著者 ロルフ・ドベリ(サンマーク出版)

長島町立鷹巣中学校

田代 正広

最近、読書量が減少していることが悩みの一つである。それでも好きな作家の小説を読むように心掛けているが、本好きの自分にとっては、少し不本意な状況である。

最近、読書以外でも、趣味、家族、仕事、今後の事など考えることが多い。

ある朝、新聞広告に目が止まった。「最新の学術研究から導いた、よりよい人生を送るための思考法」、「複雑な現代社会で生き抜くための指針」、「五十二の思考の道具箱」等。

なんだこの本？早速購入してみた。

内容は、人生が上向きになる「具体的なノウハウ」が満載されていた。まさに強力な「思考の道具箱」を手に入れることができた。

その項目について、一部を紹介すると、次の通りである。

・考えるより、行動しよう

・支払いを先にしよう

・謙虚さを心がけよう

・「現在」を楽しもう

・自分を守ろう

・解決よりも、予防をしよう

・専門分野を持とう

・期待を管理しよう

・内なる成功を目指そう

今の自分のモヤモヤ感が

だいぶすっきりした。

「なるほど」「そういう見方・考え方もあるな」と納得できた。

現代社会は、多様な価値観とストレスが年々加速している社会である。

多くの人との出会いや出来事への対応について悩むことも多い。

この本との出会いは、私にとってその対応の仕方について、何を指針にすればよいのか考える一つのきっかけになった。

このことは大きい収穫である。

この本は複数の項目で構成され、一つ一つの項目を短編小説のように、わずかな時間で上手に読める。今の私にとって、ピッタリであった。

「すぐ決まる組織」のつくり方 OODA マネジメント

著者 入江仁之(フォレスト出版)

十島村立悪石島小中学校

徳留 健一

予測不能な社会に対応できる人材育成が今回の学習指導要領改訂の目的の一つです。いかなる困難にも対応できる子どもたちを育てるために必要な「資質・能力」が盛り込まれています。

そして、限られた時間のなかで教育の質の維持・向上を図るためには、業務改善も進めていかなければなりません。そのため、カリキュラムマネジメントは重要です。

カリキュラムマネジメントの実現に向けて学校教育現場では、「PDCAサイクル」が多く用いられています。ところが、世の中は急速に変化していて、PDCAだけでは想定外のことに対応できないというのです。想定外のことに対応するためには企業で取り入れられているのが「OODAループ」理論です。「OODAループ」

理論は、もともとアメリカ軍の考えた戦略理論でしたが、その理論を応用して現在、実績を上げてきている企業が採用している理論です。「OODAループ」は、「みる (Observe) わかる (Orient) きめる (Decide) うごく (Act)」みなおす／みこす (Loop)」の5つの思考プロセスからなっています。「PDCAサイクル」は、想定内であれば対応できる理論であり、「OODAループ」は、想定外の事態にも対応できる思考理論であるのです。

「OODAループ」と「PDCAサイクル」の併用は、どちらも既に取り入れている思考だと、この本を読みながら感じました。ただ、「PDCAサイクル」の「C」に時間をかけすぎて計画を見直すのに時間がかかっているのも私の現状としてはあります。

予測不能な社会に対応できるよう、そして業務改善を進めるため、二つの理論の併用を図りながら学校経営の補佐にあたりたいです。

自由投稿

「チーム学校」での教頭の役割

鹿児島市立石谷小学校

松崎 光雄

現在の学校は、今までのどの時代よりもいろいろなことに対応する力が求められる、要望は、子供・保護者・地域・職員から無限に寄せられてくる。その多くは、教頭に集まり、日々対応を迫られている。

この課題に対応するため「チーム学校」として教育活動を進めていく必要があると私は考えている。そこでの教頭の役割には、次のようなものがあると思う。

- ①職員に教頭や主任への報告・連絡相談を常に意識させ、情報を共有化できる組織にする。
- ②校務の整理と進捗管理に努め、学校がやるべき仕事と他がやるべき仕事を明確にし、必要に応じて外部機関と連携し、校務を処理する。
- ③職員の健康やメンタルヘルスに心を配り、様々な面で職員をサポートする。

④ライフステージに応じた職員指導を行い、職員のやる気を引き出し、激励する。

⑤外部の方と連携し、それぞれの立場でチーム学校の一員として協力を依頼する。

⑥教頭がやるべきことを明確にし、自分自身の業務管理を確実に行うようにする。

教頭自身が、「チーム学校」

としてのあるべき姿を求めて、その理想に近づけていく努力を続けることが大切である。それぞれのメンバーが、それぞれの立場でやるべきことやできることを模索し、やっていくとき、「チーム学校」が活性化し、この課題を乗り越えていけると私は考える。

随想

心に火をつける

南さつま市立田布施小学校

鑑 謙治

「平凡な教師は言って聞かせ。よい教師は説明する。優秀な教師はやってみせる。しかし最高の教師は子どもの心に火をつける。」

この言葉は、私の教師生活で指針となっているウィリアム・ウオードの言葉だ。

近年、子供達の無気力や意欲の低下を感じることも多くなった。担任時代、そんな子供達に出会うたびに、「どうしたら意欲をもたせられるのか。」と試行錯誤を繰り返してきた。宿題のノルマ制をやめて、自主的な学習に取り組みせたり、人のつきあい方を学ばせるためにドッジボールや三十人三十一脚に取り組みせたり、時には、膝をつきあわせて何時間も話をしたりと様々なことを試みた。どれも私にとっては良い思い出となっている。

そんな楽しい教師生活だったので、教頭になることに関しては大きな葛藤があった。「果たして自ら楽しめる教頭になれるのだろうか・・・。」

しかし、教頭という職務に就き、日々思うことは「楽しい」ということである。子供達との関わりは、自分の学級だけから学校全員となったし、先生たちも自分の行動次第でやる気になってくれる。まさに、自分自身のスキルや人間性を高めれば結果がついてくる仕事だと思ふ。つまり、子供達一人ひとりの心に火をつけ、先生方一人ひとりの心に火をつけたとき、学校全体を大きく成長させることができると考えている。

私が勤務している田布施小学校は、義務教育学校へ向けて統合の準備を始めた。「みんなが意欲的に素晴らしい学校を目指す」そんな学校になるようがんばっていきたい。

新任教頭雑感

「もっと好きになろう」

曾於市立月野小学校

教頭 下津大輔

教頭抜擢となり、環境と立場が変わって二カ月以上が過ぎようとしている。「学校の要」、「学校を回す」、ということについてようやく自覚が芽生えてきた。足りないところを校長先生始めいろいろな人たちに助けていただき、仕事が一人数では立ち行かないこと、何かをするためには誰かの助けが必要かということを改めて痛感している。

学校の業務や仕事を回していくために、自分が尽くすべき礼儀や、仕事の依頼の仕方、締め切りが遅れるなどのミスについてどう対処すべきか、ということについて、前の職にいた時よりも深く考えるようになった。

深く考えるようになっただけではいけない。仕事の人生、いや私の人生全般で言えるかもしれないが、変

な諭えで言えば助けってもらったばかり、借金してばかりの毎日、毎年であった。これからは少しでも、恩返しではないが、助けたり、支えたりして、学校や子どもや職員のためにも少しでも役に立てる教頭として頑張りたい。

とにかく、家族と、健康と、そして学校をもっと好きになる、愛するように、自分の人生を傾けていきたい。